

中世地中海世界と文明の交流

高山博

私は福岡県の田主丸町出身ですので、九州からの講演依頼はなるべくお引き受けるつもりでいます。今回も、スケジュール調整がうまくゆき、こうして会場に來させていただくことができました。

最初に、「現代世界はシチリア化している」という言葉の話から始めたいと思います。この言葉はイタリアのある作家が使った言葉ですが、言語、宗教、文化を異にする人々が日常的に接するようになってきた現代世界の状況をシチリアに例えたものです。ただ、この言葉は現代のシチリアよりも、むしろ、異文化に属する人々の共存で栄えた中世のシチリアによく当てはまるのではないかと思っています。

私が長年研究してまいりましたノルマン・シチリア王国、つまり、十二世紀シチリアに成立したノルマン王国では、イスラム教徒のアラブ人、ギリシア正教徒のギリシア人、カトリック教徒のラテン系の人たちが併存して生活し、経済的、文化的繁栄を享受していました。現代世界では、こうした中世シチリアで生じたような異文化接触や異文化交流が、日常的になされるようになってきています。しかも、そのような現象は一部の国や地域に留まらず、世界的な規模で進行してい

ます。このように、私の研究している中世のシチリアと現在のグローバル化の動きのあいだには、ある種の類似点を見出すことができます。

ところで、ここ十数年のあいだに、一般の人々のシチリアへの関心が非常に高くなってきました。私自身、テレビ番組など、かなりシチリア関係のものに携わってまいりましたが、かつて研究をはじめた頃は、シチリアへ行っても日本人に出会うことはほとんど考えられませんでした。日本人は自分だけという感じでした。それが今はまったく違います。有名なノルマン王宮へ行きますと、大抵、日本人と出会います。あるときは、日本人を乗せた大型の観光バスが三台並んでいます。それほどに、シチリアへの関心が高まったのだと思います。

今日はそのシチリアを中心に、地中海における異文化の交流、文明の交流を考えてみたいと思います。最初は、パレルモにある遺跡を紹介してまいります。皆さんが観光でシチリアへ行けば、目にするようになるものばかりです。これはサン・カタルド教会です(写真1)。この教会には、三つの赤い丸屋根が並んでいます。これはアラブ・ノルマン様式の典型的な建物と言われています。アラブ・ノルマン様式と

は、ノルマン時代に作られたアラブ風の建物のスタイルで、四角い建物の上に、赤い丸屋根がのっています。建物の隣にはたいてい棕櫚の木が植えてあり、こういうのをイタリアで見ると、非常にエキゾチックで、異国情緒豊かな印象を与えてくれます。このサン・カタルド教会は、ノルマン・シチリア王国の初代の王ロゲリウス二世、イタリア語では「ルッジェーロ二世」になります。その宰相のマイオによって建てられたものです。マイオが暗殺されたため、結局、内部の装飾は未完成のまま終わってしまいました。しかし、当時つくられたモザイクの床が今も残っています。

このサン・カタルド教会以外にも、パレルモには、サン・ジョヴァンニ・デリ・エレミティ教会や、サン・ジョヴァンニ・デイ・レブロージ教会といったアラブ・ノルマン様式の建物があります。これは、サン・ジョヴァンニ・デリ・エレミティ教会です(写真2)。五つの赤い丸屋根がのっています。この教会はロゲリウス二世によって建てられたものです。ここには、イスラム風の庭園がいまも残っています。次は、サン・ジョヴァンニ・デイ・レブロージ教会ですが、これも赤い丸屋根がのった建物です(写真3)。この教会はノルマン時代の最も古い時期に建てられたものです。「レブロージ」とはハンセン病患者のことですが、かつてハンセン病の病院として使われていたので、このように呼ばれるようになったのです。

さて、これまでに三つのアラブ・ノルマン様式の建物をお見せしてきましたが、こういった建物を見ていると、「ここは本当にヨーロッパなのだろうか？」と不思議な気分になります。他のイタリアの都市と全然違っているからです。ヴェネチアやミラノなど、北の都市との違いはもちろんのこと、ローマやナポリとも大きく違っているからです。

どちらかと言えば、イスラム文化圏に属する北アフリカのモロッコや、イスラムの支配が長かったスペインのグラナダ、コルドバと近い印象をもっています。ただ、パレルモにあるこれらの教会が建てられたのは、イスラム教徒がシチリア島を支配していた時代ではありません。その後の、ノルマン人が支配していた時代に建てられたものです。イスラム期の建物は、ほとんど破壊されて残っておらず、私たちが目にするのできるイスラム風の建物はすべて、ノルマン期に建てられたものなのです。

このような建物は、ノルマン・シチリア王国におけるイスラムの影響の強さを示していますが、次にお見せするモザイク画にも、当時の異文化接触の影響を見ることが出来ます。これはノルマン王宮にある「ロゲリウスの間」です。イタリア語では「ルッジェーロの間」となりますが、ここに非常に綺麗なモザイクが残っています(写真4)。このモザイクのテーマは、「狩猟」だと考えられています。「狩り」をテーマにしたモザイク画ということですね。これは南側の壁ですが、上段に半馬人のケンタウロスが描かれ、下段には豹と孔雀が対照的に描かれています(写真5)。東側の壁には、弓を持った人と鹿、下段にはライオンがモザイクで描かれています(写真6)。これは同じロゲリウスの間の天井ですが、バンドというか帯、そして、蔓の文様、ライオン四匹、その間に想像上の動物であるグリフォンが描かれています(写真7)。そのまん中には驚がウサギを足でおさえている場面が描かれています。ある美術史家によれば、驚がノルマン人を象徴し、ウサギがイスラム教徒を象徴しているのだそうです。

次の写真は、同じノルマン王宮にある王宮礼拝堂です(写真8)。イタリア語でカッペラ・パラティナと言います。壁面がモザイクで覆

われて、金色に輝いていますが、こちらは先ほどのロゲリウスの間と趣きが全然違います。非常に宗教色が強く、キリスト教の聖人や聖書の場面が描かれています。正面の祭壇の上にもモザイクがありますが、そこには、ラテン語とギリシア語が記されているのがお分かり頂けると思います(写真9)。信者席の天井は木製で、アラブ様式です。そこには、宴会の場面や人物像などペルシア風の絵が描かれ、アラビア語が記されています。星型の模様が一番外枠に、アラビア文字が記されているのが見えるのではないかとおもいます。

これはパレルモの南西八キロメートルほどの小高い丘の上の町、モンレアーレにある大聖堂です。この大聖堂にはカッペッラ・パラティナを何倍にもしたような大規模なすばらしいモザイクがあります。大聖堂のなかに入ると、幅が四〇m、長さが一〇〇mほどある巨大な空間の壁面が華麗なモザイク画で覆い尽くされています(写真10)。これは正面の祭壇部分ですが、このようなキリストの半身像は、パントクラートルと呼ばれています(写真11)。

次にお見せするのは、先ほどお見せしたパレルモ旧市街にあるサン・カタルド教会の隣にある、ラ・マルトラーナ教会の内部のモザイク画です。入口を入ってすぐ左側には、このマルトラーナ教会をつくったゲオルギオスという、初代の王ロゲリウス二世の宰相が描かれています(写真12)。彼はギリシア人でした。入口を入ってすぐ右側には、キリストから直接王冠を受けるロゲリウス二世が描かれています。この教会の天井にも、非常に綺麗なモザイクが残されています(写真13)。天使や聖人を描いたもの、キリスト生誕の場面を描いたものなどです。

これまでお見せしてきたものは、現存している、皆さんがパレルモやモンレアーレに行けば見ることでできる遺跡です。ここからは、このような遺跡を残したノルマン・シチリア王国がどのようにして生まれたかを簡単にお話してまいりたいと思います。この王国はノルマン人がシチリア島とイタリア半島南部につくった王国で、ノルマン・シチリア王国と言いますが、ノルマン人はヴァイキングと同じなのか、違うのか、という点で迷う方もいらっしゃると思いますので、最初に、ノルマン人とヴァイキングの違いについてお話しておこうと思います。ノルマン人はラテン語で「ノルマンヌス」ですが、この言葉は、「北の人」という意味で、もともとは北から来た人に対して一般的に用いられていた言葉だと思われます。しかし、この言葉は、北欧のスカンディナビア半島、ユトランド半島出身で、九世紀前後にヨーロッパを荒らしまわった海賊たち、つまり、ヴァイキングを指して使われたり、ヴァイキングが定住したフランス北部のノルマンディ出身の人たちを指して使われたりしました。そのラテン語の意味が、現在のヨーロッパ諸語に受け継がれていますので、現在、私たちがノルマン人と呼んでいる人々は、ヴァイキングをさす場合もありますし、ノルマンディ出身者をさす場合もあります。

ノルマン・シチリア王国をつくったのは、ノルマン人ですが、ノルマンディ出身者という意味でのノルマン人です。イングランドのノルマン・コンクエスト、つまり、ノルマン人によるイングランド征服はご存知だと思いますが、この場合のノルマン人もノルマンディ出身のノルマン人たちです。同じ十一世紀に、ノルマンディ出身者たちがいろいろの所に出かけ、大きな影響を与えているのです。ノルマンディ公は、ノルマン・コンクエストにより、イングランドの王位を継承し

ますし、騎士たちは、ビザンツ帝国や南イタリアで傭兵として活躍しています。南イタリアでは報奨として土地をもらい、領主となる者が現れ、そのうちのいくつかが大きくなっていき、シチリア伯、あるいはアプリア公などが生まれてきます。そして、シチリア伯の息子がアプリア公を継承し、その後、シチリアの王位を教皇から認めてもらい、十二世紀にノルマン・シチリア王国が成立します。

ところで、ノルマン人が入ってきた十一世紀の南イタリアは次のような状況でした。シチリア島はイスラム教徒領で、アラブ・イスラム文化圏、そして、アプリアとカラブリアがビザンツ帝国領で、ギリシア・東方正教文化圏です。ナポリを中心としたカンパーニア地方には、ビザンツ帝国の名残の都市国家であるナポリ公国、アマルフィ公国、ガエータ公国があり、内陸部にはランゴバルト系のカープアーベネヴェント侯国、サレルノ侯国がありました。これらの国のあいだでは戦争状態が続いており、ノルマン人が傭兵として入って来るわけです。やがて、ノルマン人が勢力を拡大し、近隣地域を征服して、最終的にはノルマン・シチリア王国に統合されることとなります。こうして、シチリア島のイスラム教徒住民や、カラブリアのギリシア語を話す住民、カンパーニア地方のラテン系の住民すべてが、王国の住人となりました。その結果、ノルマン・シチリア王国は三大文化圏が交流・併存する場所となったわけです。

このような状況ですから、王国には色々な文化に属する人たちが住んでいました。言語に関していえば、基本的にアラビア語を話す人たち、ギリシア語を話す人たち、そして、フランス語やイタリア語など、ラテン語系の言語を話す人たち、ヘブライ語を話す人たちなどがいま

した。それを典型的に示すのが、四種類の文字が刻まれた石板です(写真14)。この石板は、現在、パレルモの中にある、ジーザという宮殿に展示されています。左側がラテン語で、右側がギリシア語、そして、下がアラビア語。上段は、正確に言うと、ヘブライ文字で記したアラビア語です。文字の種類は四種類ですが、言語は三種類となります。ラテン語の部分を日本語に翻訳すると、次のように書かれています。

「九月のカレンダエの十三日、グリサンドウスの母であるアンナが他界し、聖マリア大教会に埋葬された。一一四八年、インディクティオー十一年のことである。そして、六月のカレンダエの十三日、彼女の息子が主と自分自身のために建てたこの礼拝堂に移された。一一四九年、インディクティオー十二年のことである」。

次にお見せするのは、カタールニア司教座附属古文書館に保管されている、アラビア語とギリシア語が記された羊皮紙文書です。パレルモやカタールニアの文書館にはアラビア語、ギリシア語、ラテン語、あるいはそれら複数の言語で書かれた十一、十二世紀の羊皮紙文書が保管されていますが、これは、一〇九五年に作成されたシチリア伯ロゲリウス一世からカタールニア司教への寄進状です(写真15)。最初の部分はギリシア語で書かれ、真ん中がアラビア語、そして、最後の部分はまたギリシア語で書かれています。最後のギリシア語部分を翻訳して紹介しましょう。

「このプラテティア(文書)は、余、ロゲリウス伯の命により、世界紀元六六〇三年(西暦一〇九五年)、インディクティオー三年にメッシー

ナにおいて記された。しかるに、余の土地、および余の封臣たちの別のプラテアが世界紀元六六〇一年（西歴一〇九三年）にマザーラで記されていた。それゆえ、次のことを命ずる。すなわち、もし、カタニア司教に譲渡されるこのプラテアの中に記されているサラセン人たちのうちの誰かが、余のプラテアや余の封臣たちのプラテアの中に見出されたならば、その者は例外なく、ただちに返却されなければならぬ」というものである」。

次にお見せするのは、一一四五年に作成されたものですが、これは先ほどお見せした一〇九五年の羊皮紙文書、つまり寄進状を五〇年ほどのちに更新したものです（写真16）。そのため基本的に中身は一緒ですが、最初の部分がなくなっています。あいだの名簿の部分には、アラビア語とギリシア語で住民の名前が記されています。最後の部分は、アラビア語です。これらの二つの羊皮紙文書の形式を比較するだけでも、いくつかのことがわかります。たとえば、一〇九五年の羊皮紙文書の場合は、ギリシア語の説明、アラビア語の名簿、ギリシア語の説明の順で書かれています。一一四五年の羊皮紙文書の場合は、おそらくは最初がアラビア語の説明で、名簿の部分がアラビア語とギリシア語併記、最後にアラビア語の説明となっています。つまり、十一世紀末にこの文書が作成された時には、ギリシア人書記が中心となり、説明部分を書いたのに対し、十二世紀半ばに更新されたときには、説明部分がアラビア語で書かれ、アラブ人書記が中心にいたことが推測されるわけです。この五〇年の間に何が起きたのかを探ることも、興味深い研究テーマの一つになるのではないかと思います。

さて、この王国では、アラブ・イスラム文化、ギリシア・東方正教

文化、ラテン・カトリック文化を背景にもつ人々が、併存して生活していました。しかし、これらの異なる文化集団に属する人々は、王国内に混住していたわけではなく、モザイク状に住み分けて生活していました。シチリア島の南部、中央部、西部には多くのアラブ人が住んでおり、北東部にはギリシア人とアラブ人が住んでいました。カラブリアの住民の多くはギリシア人であり、それより北の住民の大部分は当時「ランゴバルド人」と表現される南イタリア人でした。階層で分ければ、世俗の領主たちのほとんどはラテン系、とりわけ、ノルマン人であり、大所領を有する教会や修道院の聖職者たちの多くもラテン系でした。農民の多くは、シチリアではアラブ人、ギリシア人。イタリア半島部では、ギリシア人か南イタリア人でした。しかし、王に仕える役人たちは、アラブ人、ギリシア人、ラテン系をすべて含んでいました。

さて、当時の王国の様子ですが、イブン・ジュバイルというスペイン出身のイスラム教徒の旅行者が、一一八四年から一一八五年にかけての冬にシチリアに立ち寄り、この町のイスラム教徒住民について次のように説明しています。

「この町のムスリムたちは、まだ信仰を守っており、ほとんどのモスクも維持され、アザーン（礼拝の呼びかけ）の音が聞こえると礼拝を行っている。彼らは町の郊外に居住地をもち、キリスト教徒から離れて暮らしている。市場はムスリムたちで賑わい、ムスリムがその商人である。フトバ（説教）が禁止されているため、彼らは金曜礼拝ができない。しかし、祭日にだけは、アッバース朝カリフの名でフト

バを唱え礼拝することが許されている。彼らには訴訟を申し立てる裁判官がいるし、会衆モスクもある。この祝福された(ラマダーン)月には、彼らはそこに集まり、ランプの灯影のもとで礼拝を行ない祝うのである。普通のモスクは数多くあり、数え上げることが出来ないほどである。そのほとんどは塾として使われ、教師がコーランを教えている。しかし、総じて彼らはムスリムの同胞たちから遠く離れ、異教徒の庇護の下で暮らしており、彼らの財産も妻女たちも子供たちも安全が保障されていない。」(イブン・ジュバイル「藤本勝次・池田修監訳」『旅行記』関西大学出版部、三三七ページ)

さらに、イブン・ジュバイルは、キリスト教徒の女性たちについて、次のような記述を残しています。この町、つまりパレルモですが、

「この町のキリスト教徒の女たちは、ムスリム女性のような装いをしている。正しいアラビア語を流暢に話し、外衣で身を包み、ベールをつけている。前述のこの祭日(クリスマス)には金糸で刺繍した絹の着物を着、優雅な衣服で身を包み、色付きのベールで顔を覆い、金糸で刺繍したスリッパを履いて出てきた。装飾品をつけて着飾り、ヘンナで化粧をし、香水をつけ、ムスリムの女性たちと全く同じような装いをして、全員が自分たちの所属する教会というより巢窟へと練り歩いた。」(イブン・ジュバイル『旅行記』、三三八ページ)

では、次にパレルモのノルマン王宮内にどのような人たちがいたかを紹介したいと思います。王宮にはたくさん外国人や異教徒たちがいましたが、外国人の代表は王妃たちです。初代の王のロゲリウス二

世の王妃はスペインのカステイリア王女でした。彼女が亡くなった後、ロゲリウス二世はシベリアと結婚しますが、シベリアはフランスのブルゴーニュ公の娘でした。さらにシベリアが亡くなった後は、ベアトリクスと再婚するのですが、ベアトリクスはフランスのレテル伯の娘でした。二代目の王ウイレルムス一世の王妃マルガリータはスペインのナバーラ王女で、三代目ウイレルムス二世の王妃ヨハンナはイングランド王女でした。このように、ノルマン王たちは、外国から王妃を迎えていました。

王宮にはイスラム教徒たちが大勢いましたが、王を世話するために多くのイスラム教徒のアラブ人たちが雇われていました。先ほど紹介したイブン・ジュバイルによりますと、三代目のウイレルムス二世は、アラブ人たちを深く信用して、身辺の業務や重要な事柄をすべて任せたいと記しています。また、料理長もイスラム教徒であり、イスラム教徒の黒人奴隸からなる軍団も抱えていたといえます。さらに、王の側近くに仕える宦官の小姓たち、侍女や女官のほとんどもやはりイスラム教徒でした。王宮に連れて来られたフランク人の女性たちが王宮の侍女たちの影響を受けてキリスト教からイスラム教へと改宗していたということも記しています。

初代の王ロゲリウス二世は大事な事柄のほとんどを自分で処理していましたが、彼のあとを継いだウイレルムス一世とウイレルムス二世は、王宮や別荘にこもって安楽な生活を送る方を好み、国政に携わることはほとんどありませんでした。王の代わりに政治を行っていたのは、宰相であり、宰相が置かれなかった場合は、王国最高顧問団でした。そして、宰相となっていたのは多くの場合外国人でした。たとえば、先ほど紹介した初代のロゲリウス二世の宰相ゲオルギオスはギリシア

人でした。ウイレルムス一世の宰相のマイオはバーリ出身の南イタリア人ですが、その次のウイレルムス二世の宰相のペトルスはジェルバ島生まれのアラブ人宦官です。そして、彼の後宰相になったステファヌスはフランス人でした。このように宰相の多くは外国人でした。

宰相がおかない時には、「フアマリアーレス・レギス」と呼ばれる王国最高顧問団、つまり、複数の大臣たちが国政を担っていました。そして、この王国最高顧問団のなかにも、アラブ人宦官や外国人が多く含まれていました。時にはノルマン人の封建家臣が含まれることもありましたが、王国最高顧問団のほとんどは、アラブ人宦官や外国人、そして聖職者でした。これらの人々が王国を治めていたのです。

このように、パレルモの王宮には様々な文化的背景をもつ人々がいました。海外から来た学者たちもいます。とりわけ有名なのは、イドリーシーというイスラム世界を代表する地理学者です。イドリーシーはロゲリウス二世の依頼で世界地図を作りました。この世界地図は巨大な銀板の上に描かれたのですが、王国の騒乱のなかで消失しており、その世界地図そのものは残っていません。ただ、彼がその説明書として書いた『世界各地の全知識を望む者の慰み』が残っています。それによってこの時代の地中海周辺の状況がかなり詳しく分かります。この書は王の名にちなんで『ロゲリウスの書』とも呼ばれています。イドリーシーが書いたこの本は、イスラム世界を代表する地理書として後世まで伝えられ、ヨーロッパの地理学にも大きな影響を与えました。さらに、パレルモの王宮には、ネイロス・ドクソパトレースというビザンツ帝国出身の神学者がいました。彼はコンスタンティノープル総主教の書記であり、ハギア・ソフィアの輔祭でしたが、ロゲリウス二世の依頼により『総主教座の配列』という書物を書いています。

では次に、十二世紀ルネサンスについてお話ししておきたいと思います。二〇世紀初頭、ハスキンズというアメリカの中世史家が『十二世紀ルネサンス』という書物を刊行しました。彼はこの本で、十二世紀のヨーロッパがそれまで考えられていたような暗黒時代ではなく、ルネサンスと同じように文化活動が盛んな時代であったことを明らかにしました。このハスキンズの十二世紀ルネサンス論において重要な位置を占めるのが、スペインの翻訳活動とシチリアの翻訳活動です。ノルマン王国時代のシチリアでは、ギリシア語、アラビア語の哲学書、自然科学書がラテン語に翻訳されてヨーロッパに導入されました。そして、それを消化・吸収したヨーロッパが十二世紀から十三世紀にかけて飛躍的な文化的発展を遂げる、という訳です。

このような視点から、シチリア王国はヨーロッパが東方文化を受け入れる窓口と見なされてきました。そして、ノルマン・シチリア王国における翻訳活動や王国を訪れた西欧知識人たちが注目を浴びるようになりました。王国最高顧問団メンバーの一人、ヘンリクス・アリスティップスは、王国最高顧問団のメンバーとしてよりは、プラトンの『メノン』と『フアイドン』、アリストテレスの『気象学』のギリシア語からラテン語への翻訳者として知られていますし、ドゥアーナ・バローヌムという役所の長官として働いていたエウゲニオスも、役人としてよりは、プトレマイオスの『光学』をアラビア語からラテン語へ翻訳した人物として知られています。

シチリアの宮廷は、ヨーロッパの知識人にとっては、アラビア語、ギリシア語文献を研究する前線基地のひとつでした。ギリシア語やアラビア語の写本、そしてそのラテン語訳を求めてシチリアを訪れた知

識人も多くいます。例えば、エウクレイデス（ユークリッド）の「原論」をアラビア語からラテン語に翻訳したバースのアデラルドウスは、南イタリアでアラビア語を学んだ後、イスラム世界を旅しました。中世政治思想を代表するソールズベリのヨハンネスや、ラテン語学者として有名なブリアのペトルスも南イタリアを訪れています。さらに、イングランド王ヘンリクス（ヘンリ）二世の息子のために『滑稽読本』を書き、神聖ローマ皇帝オットー四世に捧げるために『皇帝余録』を書いたティルベリのゲルウアシウスも、南イタリア、シチリア滞在の経験をもっています。このように十一世紀から十二世紀にかけて、当時のヨーロッパ世界を代表する知識人の多くが南イタリアを訪れ、そこで得た情報や知識をフランスやイギリスに持ち帰っていったわけです。

このようにノルマン・シチリア王国がヨーロッパの東方文化を受け入れる場所であったことは間違いないのですが、私たちはそのようなヨーロッパにとつての意味だけにこだわる必要もないのではないかと思います。時間枠と空間枠を少し広げてみれば、この現象が複数の文化圏のあいだの文化移転の一部であることが容易に理解されるでしょう。イスラム教徒たちはかつて、古代ギリシアやインドの学問を学んで、イスラム世界で飛躍的に発展する哲学や自然科学の礎を築きました。イスラム世界の学術研究の拠点であるバグダードの「知恵の館」は、元々はギリシア語の文献をアラビア語に翻訳するために九世紀にアッバース朝カリフによって作られたものです。それから十三世紀を経た十二世紀に、今度はイスラム世界の学問がシチリアやスペインを経由してヨーロッパ世界に入っていったわけです。このように、シチリアやスペインにおける翻訳活動、そして、それによって生じる「十二

世紀ルネサンス」は、イスラム世界から中世ヨーロッパ世界へ学問や芸術が伝わる文化移転の一部として捉えることができます。

最初にお見せした写真に戻りますが、このような特徴をもつシチリア王国の建物やモザイク画に色々な文化的要素が含まれているのは、ごく自然なことのように思われます。

それでは、何故、王国ではこのような異文化併存が可能だったのでしょうか。その理由について考えてみたいと思います。ヨーロッパの歴史家たちは、この王国の異文化併存状態をキリスト教の寛容性の象徴としてしばしば言及してきました。しかし、キリスト教の寛容性がこの異文化共存状態を可能としたわけではありません。イブン・ジュバイルは、この島のイスラム教徒たちが改宗の圧力の下で生活していたことを記しています。このシチリア島のイスラム教徒たちの指導者の一人、アブー・アルカーシムは高位の役人としてウイレルムス二世に仕えていましたが、北アフリカのムワッヒド朝と内通しているという告発を受けて、王の保護を解かれ、自宅に監禁されます。彼の財産は没収され、三万ムミニヤ・ディーナルを越す罰金を科されました。彼の場合は、そのような状況に落とされても改宗の圧力に屈しませんでした。中にはキリスト教に改宗した者たちもいます。例えば、イブン・ズルアというイスラム法学者は、役人に強要されてイスラムの信仰から離脱し、キリスト教に入信しました。彼の場合は改宗した後、キリスト教徒の法を学び、キリスト教徒とイスラム教徒の両方の裁判を行うようになったということです。さらに、イブン・ジュバイルはこのノルマン・シチリア王国のイスラム教徒に関する次のような興味深いエピソードを書き残しています。キリスト教徒の中で暮らす

イスラム教徒たちは、妻や子供を不用意に叱ることができなかつた。というのも、彼らを厳しく叱ると教会にかけこんでキリスト教に改宗してしまう恐れがあつたからです。もし一度キリスト教徒として洗礼を受けてしまうと捜し出すことが出来なくなるので、イスラム教徒たちは家族や子供に対して非常に気を遣つて生活していたといひます。

この王国で異文化集団の共存が可能だつたのは、ここに住むキリスト教徒が宗教的・文化的に寛容だつたからではありません。強力な王権がイスラム教徒を必要とし、彼らに対する攻撃・排斥を抑制していたからです。実際、戦争が起こつたり、争乱が起こつたりすると必ずと言ってよいほど、異文化集団、特にイスラム教徒に対する略奪や攻撃が行われています。また、王国のイスラム教徒の人口が減少し、王権にとってイスラム教徒が不要になってくると、イスラム教徒住民に対する王の態度も冷淡になっていきます。そして最終的には、異文化集団によって支えられた王国の文化的、経済的繁栄も終焉を迎えることとなります。

では、最後に、王国がどうなつたかをお話ししておきたいと思ひます。一一八九年、三代目の王ウイレムス二世は、三六歳の若さで亡くなりました。十二世紀末にエボリのペトルスが書いた書物の挿絵では、ベッドに横たわるウイレムス二世の周りに、イスラム教徒たちが描かれています(写真17)。ターバンを巻いたイスラム教徒の医者、ガラス瓶をかかげて、王の尿をチェックしています。その右隣には小姓がいて、さらに右側には、アストロラーベ(天体観測儀)をもつた占星術師がいます。臨終の王を囲むこれらのイスラム教徒たちは、王国の状況を象徴的に表していると言ひます。

ウイレムス二世は王位を託すことのできる息子も兄弟もないまま没したため、彼の死後、王位継承問題が起こり、王国は内乱状態に陥りました。最終的にレッツェ伯タンクレドゥスが王位を受け継ぎますが、彼の治世、ずっと戦争が続くこととなります。そして彼が一一九四年に没すると、神聖ローマ皇帝ヘンリクス(ハインリヒ)六世が軍隊を率いて王国に攻め入り、パレルモで王冠を戴きます。こうして、王国は神聖ローマ皇帝ヘンリクス六世の手に落ちることになります。多くの歴史家たちは、シチリア王国の歴史が終つたと考えています。つたとき、ノルマン・シチリア王国の歴史が終つたと考えています。しかし、ノルマン人の血がここで途絶えたわけではありません。ヘンリクス六世の妻コンスタンティアはノルマン王国初代の王ロゲリウス二世の娘であり、そのノルマン王家の血が、息子フレデリクス(フリードリヒ)二世へと受け継がれているからです。

後に神聖ローマ皇帝となるフレデリクス二世は、第五回十字軍で、戦争によつてではなく、交渉によつて聖地エルサレムを取り返した人物です。彼は一一九七年に三歳でシチリア王となりますが、その翌年に母親が亡くなり、孤児となります。その後は、教皇の後見を受けて、パレルモでイスラム教徒によつて育てられたともいわれています。一二〇八年に十四歳で成人し、一二一二年にドイツ王となり、一二二〇年に神聖ローマ皇帝となり、一二五〇年に亡くなっています。

複数の文化の交差点としてのシチリア王国は、このフレデリクス二世の治世半ばで終わりました。それを象徴的に示すのが、一二二〇年代に行われたシチリアのイスラム教徒の強制移住です。フレデリクス二世は、北アフリカのイスラム君主たちの援助を受けて反乱を繰り返していたシチリア島のイスラム教徒約二万人を、半島部のルチエーラ

に移住させたのです。王国の特徴であったイスラム教徒とキリスト教徒の並存は、こうして十三世紀初頭に終わりました。そしてイスラム教徒の灌漑技術や農業技術が支えていたシチリア島の多様で緑豊かな農業も失われることとなります。地中海貿易における中継地としての役割も大幅に低下し、旺盛な商業活動も見られなくなります。

フレデリクス二世の宮廷ではまだ華やかな学術・文化活動が行われていましたが、それは異文化並存という過去の遺産が燃え尽きる前の最後の煌めきだったようにも思えます。一二五〇年に彼が亡くなると、南イタリアにおいて異文化の交流が支えていた豊かで、非常に魅力的な時代は終焉を迎えます。その後の南イタリアは、華やかな歴史の表舞台から姿を消し、政治的混迷と経済的衰退に特徴づけられる、ある意味では暗い時代を迎えることになるのです。

以上で今日の講演を終了させていただきます。ご静聴ありがとうございました。